



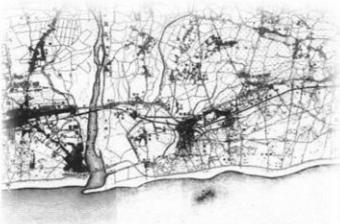
トピックス

「チガ」「崎」

いにしえの昔、茅ヶ崎の浜には、ススキ、ヨシ、チガヤ等、イネ科の植物が生い茂っていました。この植物たちは屋根を葺く材料として最適で、日本中の文化財の屋根を葺いてきています。生えていた場所は、相模川の蛇行で半島のように突き出したところでした。この形状を“崎”と呼びます。この2つがあわさって「茅ヶ崎」と言われるようになったと思われます。（K）



チガヤ



茅ヶ崎市域地図（昭和12～14年）

トピックス

「楽園」

プランチ茅ヶ崎にある、ラクサ（シンガポールやマレーシアなどで食べられている、香辛料の効いたココナツミルクベースのスパイシーな麺）専門店「楽園」。店内に一步踏み入ると、そこは東南アジア。正直、特定の国が断定できないカオス状態が最高！もちろん、五種類のタイプの麺が選べるラクサは絶品！マスターが、テーブルに運んで来て「行ってらっしゃい！」の一言から、東南アジア美食ツアーがスタート。一見、豆板醤の塊に見えるエビの旨味を溶かし込みながらいただきます。



ディスプレイ、調度品、BGM…
どれも南国情緒に溢れた空間です。（M）

今月の人！

丸博ゆかりの人物紹介 添田 啼蝉坊（そえだ あぜんぼう）

「貧乏でこそあれ 日本人はえらい それに第一 辛抱強い 天井知らずに 物価はあがっても 湯なり粥なり すすって生きている♪アノンキだね♪」（「のんき節」）…添田 啼蝉坊（1872年生、本名平吉）は、18歳の時に壮士節（自由民権運動の壮士が街頭演説に節をつけた歌）に感銘を受け、街頭で歌を披露し庶民の心を代弁する「演歌師」としての道を歩み始めました。彼は、自身が歌詞を書き歌うニシンガーソングライターの先駆ともいわれています。当時の政治批判色の強い歌から純粋な演歌と創作を重ね、「むらさき節」、「まっくろけ節」、「のんき節」など182曲を残しています。なかでも「ラッパ節」は、漱石の「吾輩は猫である」にも登場するほど大流行しました。茅ヶ崎との縁は、1901に太田タケと結婚、タケの実家があった茅ヶ崎に引越し、駅前の和菓子屋「釜成屋」前角に居を構えたことに端を発します。そこには、川上音二郎一座も訪ねてきたと彼の手記に記されています。生活の不安定を案じた義兄の勧めから、この地でハンカチ工場を始めましたが、事業は半年で失敗となり、再び演歌師に戻り全盛期を迎えたのち1930年に引退、その後無一文となり1944年東京で亡くなりました。（M）

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館ってなに？



2003年よりエコミュージアム（※）という理念のもと、茅ヶ崎市の全域を屋根も壁もない博物館と見立てて、文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材（もちろんあなたも）などの「このまちらしさ」をもつ、いろいろな事柄を幅広く選び出し、これらの都市資源を調査・研究し、それぞれを関連付けて活用を図るのが、「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」です。この活動を通じて茅ヶ崎を知り、茅ヶ崎を好きになり、茅ヶ崎を誇りに思う人を増やし、まちの活性化につなげていきます。ぜひ皆さんも私たちと一緒に丸博に参加しませんか。

※エコミュージアムとは、地域環境そのものが博物館であるという考え方で、運営する者も利用する者も、地域住民であることが大きな特徴です。

編集後記

今号は柳島周辺地域を採り上げました。記事の執筆はアクションプロジェクトのメンバーで分担をして行っていますが、「旧藤間家住宅と富永さん」のインタビューもメンバーで行いました。富永さんのインタビューについては紙面の関係ですべてを記載できていませんが、旧藤間家住宅に訪れてもらえるきっかけになればうれしいです！冬に入り、寒さも増してきましたが、旧藤間家住宅をはじめとした柳島周辺に散策に出かけましょう！（編集スタッフ一同）



屋根も壁もない・・・市内が全部博物館・・・



ふるさと発見
ちがさき 丸ごと 博物館

愛称は「ちがさき丸ごと博物館」



丸博百景No.5 小出川 ヒガンバナを楽しむ

※丸博百景では誰でも自由に入れる景勝地を紹介します。

茅ヶ崎で今一番ホットな地域＝「柳島周辺」、その魅力と隠れた名所を丸博流に大紹介！

今回の季刊誌では、7月に開業した「道の駅 湘南ちがさき」で注目を集める西南端地域＝柳島周辺を紹介します。ここには、湘南で唯一の海沿い「公営キャンプ場」、ヤシの木と芝生が広がる「しおさい公園」、スタジアムやジョギングコースが整った「スポーツ公園」など、自然との一体感が楽しめる施設が揃っています。また、富士山や丹沢の美しい眺めが訪れる人々を魅了するエリアです。当地は、かつて港を有し水上交流の要所として茅ヶ崎における横浜や神戸のような役割を担い、その立役者である「藤間柳庵」の活動は地域文化の形成に大きく寄与しました。また、高度経済成長期に建設された「浜見平団地」は都市計画の象徴として人口増加と生活基盤の整備に貢献しています。柳島周辺地域は、茅ヶ崎の「新しい文化の窓口」として港湾史・戦後都市計画・文化史・地域社会史が重層的に交わる、茅ヶ崎の近現代、そして未来を語る上で欠かせない存在です。

旧藤間家住宅と富永さん

国の登録有形文化財の旧藤間家を管理する富永さんにQ&A形式で旧藤間家のあれこれを聞いてみました！
Q.旧藤間家とはどのような文化財ですか？みどころも教えてください。

A.国の登録有形文化財であり、当時全国的に有名だった西村伊作によって設計された一間洋館付き住宅（和風の住宅に一間の洋館を合わせた住宅）です。昔に建てられた邸宅がいまだに使われているところに有形文化財としての価値があります。また、邸宅の奥の部分は関東大震災の翌年には作られたと考えられ、震災の混乱直後のため邸宅に対してかなり細い柱が使われています。井戸の跡もみどころの1つです。藤間柳庵が人力によるボーリング方式の井戸を作ったようとして、あふれ出る水と熱海温泉から貰ってきた湯を混ぜて湯屋を作ったそうです。この藤間温泉は地域住民に大変親しまれていたようです。

Q.富永さんと藤間家がかかわるようになったのはいつ頃ですか？

A.私は茅ヶ崎市社会教育課で文化財保護を担当していました。今は枯れてしましましたが、天然記念物であったキャラボクがあり、時折来ることがありました。私の専門は考古学であり、自身の領域とは異なるものの20数年前から少しずつかわるようになり、そうした中で当時の主人（藤間雄蔵さん）が石垣を作り直すということになり、社会教育課で発掘調査を行いました。その後、別件の発掘調査があり建物の基礎石が出てきました。これらの発掘調査から本格的にかかわるようになりました。

また、藤間家には昔からいろいろな見学者が来ていて、ご主人が大事にもてなしていました。その中で、旧藤間家の文化財としての重要性を説明してほしいという依頼があり、説明を行うようになりました。かかわりを深めていきました。

Q.旧藤間家という文化財を守っていくうえで気を付けていらっしゃることはありますか？

A.9年前に市に寄贈していただいたものでして、現状維持をして、当時と同じような景色、同じような流れが存在するように気を付けています。

Q.旧藤間家をどのような場所にしていきたいですか。

A.旧藤間家には庭も含めて茅ヶ崎の原風景が残っています。「なつかしさ」「癒しの空間」といったものが調和した空間になっていってほしいですね。管理しているまだ訪れていない人には、ぜひ「自分の庭だ」と思って来てほしいです。（聞き手S）白澤さん・富永さん



浜見平の現在昔～61年前の浜見平～

コンフォール茅ヶ崎浜見平というマンション街となり、現在も開発が進められている浜見平団地。実は、浜見平という住居表示は昭和37年5月10日に「住居表示に関する法律」が公布・施行され、実施されており、この時はまだ浜見平という表示名だけで住居はありませんでした。では、61年前の浜見平はどうだったのでしょうか。

昭和39年（1964年）に建てられた浜見平団地は松尾川を境に東側は南湖に接していました。小沢整形外科の東側に松尾川が流れていますが、橋があった当時は子供達が釣竿を垂らして集まっていました。上から見ると鮒などの魚がウヨウヨいるのが見え、子供達の遊び場でした。現在の浜見平のところは大字松尾字川田と呼ばれていた水田で、台風の後などは畦が僅かに見えるくらい水で満ちています。

浜見平団地が建てられたこの年はアジア初の東京オリンピックが開催され、東海道新幹線と東京モノレールが開通した年でした。茅ヶ崎を見れば茅ヶ崎ショッピングセンターが開設された年でもありました。現在の浜見平に立ってみても、61年前は想像もできないですね。（H）



昭和40年代の浜見平※1
※団地沿いに流れていたのが松尾川



柳島の地理 昔から今へ

6千年前の縄文時代、茅ヶ崎は海の中でした。それ以前の4万年前頃から1万2千年前頃までは最後の氷河期であり、茅ヶ崎は鳥帽子岩のあたりまで陸地となっており、今の地面からは約100mほど下に地面がありました。その後、1万2千年前頃から6千年前頃にかけて地球は急速に温暖化しました。

さて、このように地形が変わってきた中で、大昔の相模川は高田・室田のあたりまで流れしていましたが、時代とともに、西へ川筋を変えてきました。町屋の二トリの前の旧相模川橋脚跡（国指定史跡）は、源頼朝の家臣の稻毛三郎重成が亡き妻（北条政子の妹）を供養するために架けたと考えられています。鎌倉時代には、相模川はこのあたりを流れています。発掘の際に見つかった液状化に伴う地形の剥ぎ取りが博物館に保管されています。

現在の国道1号線は、昔の東海道です。鎌倉時代の鎌倉古道は東海道より少し北を通り、現在の文化会館、体育館の北側あたりを通っていました。相模川は頻繁に氾濫して、川筋がよく変わっていました。柳島や中島、浜見平のあたりは、地形が島状になったり、島の形状も頻繁に変わったりしたようです。

浜見平の外側の松尾川は、現在はほとんど暗渠（※）になっていますが、昔は鶴嶺八幡宮の大鳥居あたりで小出川と千の川が合流して松尾川となり、現在の浜見平を通り抜けて海へ注いでいました。江戸時代後半や明治時代には、柳島などで取れた魚を、舟を漕いで、町屋のあたりまで運んで売りさばいていたようです。

現在の浜見平のあたりは、田んぼや畠でしたが、川の氾濫や松尾川の逆流等でしばしば水浸しになりました。作物が十分にとれない貧しい地域でした。逆流を防ぐために閘門（こうもん）も設けられました。その後、大正12年の関東大震災で、柳島等の海岸線が1～2m隆起したことによって、川の逆流もなくなり、肥沃な土地になりました。（H）

※暗渠（あんきょ）…地下に埋設された河川や水路のこと



昔の松尾川

柳島の温泉

柳島には江戸時代末期から大正時代にかけて、藤間温泉、大南の湯屋（山口屋）、數下温泉の湯屋の3ヶ所があったと「柳島うつりかわり」（平成2年3月発行）で青木千代氏が語っています。その後、杉山全氏により、柳島海岸地区には人参湯の存在が調査で判明したため、柳島には湯屋が4軒あったことになります。

なかでも、大南の湯屋（山口屋）は実証できる石碑がフレンチレストランのル・ニコ・ア・オーミナミ付近にあります。稻荷の前に立っている石碑には「あたみかわらゆ 湯治所山口屋」とあり、「柳庵老人書」とあるように藤間柳庵が揮毫しています。調べてみると「あたみかわらゆ」は現実に熱海にありました。熱海にあった玉久運送店の湯樽出荷帳に「藤間様」とあり、藤間家が熱海から柳島に湯樽を運んだ記録が残っています。熱海から温泉が茅ヶ崎に運ばれ、その温泉を楽しんでいた柳島の人々、想像するだけでも楽しいですね。（H）

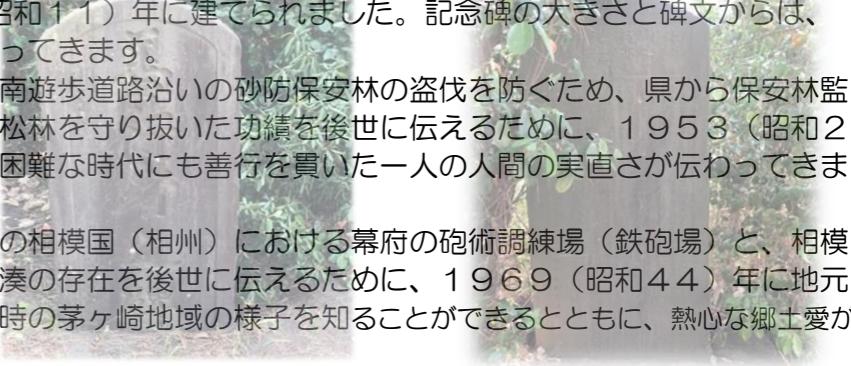
柳島の茅ヶ崎地域の歴史を刻んだ3基の記念碑～湘南三碑～

道の駅から歩いて10分ほどの柳島海岸入口近くの国道134号線沿いの松林の中に、朱色の鳥居（八大龍王）があり、そこには3基の記念碑が並んで建っています。

「湘南道路の碑」は、現在の国道134号線の前身である湘南遊歩道路が、藤沢市片瀬から大磯町まで全長16.7km開通したのを記念して、1936（昭和11）年に建てられました。記念碑の大きさと碑文からは、昭和初期の湘南地域発展への期待と熱意が伝わってきます。

「善行者の碑」は、戦後の燃料不足から、湘南遊歩道路沿いの砂防保安林の盗伐を防ぐため、県から保安林監視員の委託を受けた内藤亀太郎氏が柳島海岸の松林を守り抜いた功績を後世に伝えるために、1953（昭和28）年に建てられました。碑文からは、戦後の困難な時代にも善行を貢いた一人の人間の実直さが伝わってきます。

「相州砲術場と柳島湊跡の碑」は、江戸時代の相模国（相州）における幕府の砲術調練場（鉄砲場）と、相模川河口に位置し、物資輸送の要衝であった柳島湊の存在を後世に伝えるために、1969（昭和44）年に地元有志によって建てられました。碑文からは、当時の茅ヶ崎地域の様子を知ることができるとともに、熱心な郷土愛が伝わってきます。（N）



※1 『保存版 ふるさと茅ヶ崎』（2012年 神津良子）より

※2 『茅ヶ崎市史 現代10 レンズの中の茅ヶ崎一昭和の記憶』（2008年 茅ヶ崎市文化推進課市史編さん担当）より